

富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査第4次調査概報

伝承 真興寺跡

1999年3月

上市町教育委員会

富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査第4次調査概報

伝承 真興寺跡

1999年3月

上市町教育委員会

序

上市町では、平成6年に下水道管理用道路敷設に伴う発掘調査で、12世紀末から14世紀までの中世墳丘墓群を調査しました。この遺跡は黒川上山古墓群であり、完全な形で今に残る全国でもまれな遺跡であることが判明しました。町ではその重要性から道路の方線変更を行い、全面的に遺跡を保存し、同年12月には上市町指定史跡として後世に残すことになりました。

上市町教育委員会ではこの遺跡を次代に残すため保存整備をする予定ですが、その資料作成のための発掘調査を平成8年度より国庫補助を得て計画的に行っております。

前回調査まで、12世紀後半から15世紀に及ぶ墳丘墓67基、黒川上山古墓群の東側に古墓群よりやや古いと思われる6基の墳丘墓、石垣造構、平坦面、石列、礎石跡が確認されました。

今回は前回調査までの結果をふまえ、黒川村山中に約千年前にあったと伝承される旧真興寺の比定地を調査しました。その結果、本堂跡、塔跡、堂跡と思われる基壇、礎石などが確認されました。また池跡と思われる窪み、湧水地、盛土、大きな窪みのある平坦面が発見され、この地が旧真興寺跡であることが判明しました。

さらに分布調査では、周辺の山林に大小様々な平坦面が確認されました。一帯が、黒川上山古墓群・黒川塚跡東遺跡・真興寺跡を含めた一大靈場であったことが示されました。

調査は、平成10年10月から平成11年3月にかけて実施しましたが、この間に掘り出された資料が上市町及び富山県の歴史を物語るよですがとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多大なご指導をいただきました文化庁記念物課、富山県文化課、富山県埋蔵文化財センター、黒川地区のみなさまに心より感謝申し上げます。

平成11年3月

上市町教育委員会

例　　言

- 1 本書は富山県中新川郡上市町黒川地内に所在する伝承 真興寺跡の発掘報告書である。
- 2 調査は、平成10年10月8日から平成11年3月31日まで延べ34日間で実施した。分布調査は、富山大学人文学部考古学研究室の協力を得て、平成10年11月7日から8日までの2日間で行った。
- 3 調査面積は3,200m²である。
- 4 調査は、国庫補助金、県補助金を得て上市町教育委員会が実施した。
- 5 調査事務局は上市町教育委員会にあり、調査期間中、文化庁記念物課、富山県教育委員会（文化課・県埋蔵文化財センター）の指導を受けた。事務及び調査担当は、生涯学習課文化振興係係長高慶孝、同嘱託新本万里子が担当し、生涯学習課長山口哲夫が総括した。
- 6 遺物の整理、本書の編集、執筆は調査担当が行つたが、遺物の実測・トレースは調査担当が中心となり、後述する整理作業員が行つた。
- 7 調査期間中、文化庁文化財調査官 坂井秀弥氏、富山考古学会 西井龍儀氏、富山県文化課副主幹 潤 清氏、同主任 河西健二氏、富山県埋蔵文化財センター所長代理 上野章氏、同副主幹・調査課長 宮田進一氏各氏の視察を受け、ご指導をいただいた。また、富山大学人文学部教授宇野隆夫氏には、調査期間中、現地も含めて数々のご指導、ご協力をいただいた。
　その他調査期間中及び本書の作成にあたり、下記の方々から有意義なご指導・助言並びにご協力を頂いた。記して深甚なる謝意としたい。
和歌山県文化課 辻本浩、高野山靈宝館、富山東高校教諭 舟崎久夫、富山県埋蔵文化財センター所長 岸本雅俊、同主任 斎藤隆、橋本正春、財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所所長 桃野真児、立山町教育委員会社会教育課主事 三鍋秀典、同学芸員 新本真之、上市町山加積公民館館長 井原政昭（順不同、敬称略）
- 8 調査参加者はつぎのとおりである。
山崎雅恵（以上富山大学大学院） 佐々木亮二、砂田晋司、井出靖夫、瓜生日奈子、高橋泰生、塚田直哉（以上富山大学学生） 荒木智恵子、石井勝代、伊藤キミ子、伊東廉一、伊藤萩子、井原ハチエ、岩城秀子、大沢邦子、大沢富子、金子みつゑ、神谷トシ子、川上富美子、黒田忠美子、酒井英子、酒井文子、塩田和子、甚内みき子、高木英子、高木富美子、高木準子、竹林昭夫、田中フミ子、谷口京子、中川セツ、西川文一、早崎秋子、松井早苗、松本ミツ子、三輪光子、森田礼子、森田カズ子、安村ミツ子、若木啓子（以上作業員） 塩田和子、甚内みき子、松井早苗（以上整理作業員）
(分布調査参加者) 中谷正和、小野基、小幡聰子、戸瀬暢宏、佐々木健二、早川さやか、荒木慎也、磯村愛子、高橋泰生、遠野いづみ、廣瀬直樹、真井田宏彰、阿部来、表原孝好、片桐清恵、川瀬良招、不嶋美穂、八巻謙司、山口欧志、井出靖夫、瓜生日奈子、塚田直哉（以上富山大学学生）

目 次

序	
例 言	
目 次	
I 遺跡の環境	1
第1図 地形と周辺の遺跡	2
II 調査に至る経過	3
III 調査の経過と層序	3
第2図 遺跡周辺図	4
IV 調査結果	5
1. 遺構	5
黒川集落背後の山間部の分布調査について	8
2. 遺物	9
3. 真興寺の遺構配置について	13
V まとめ	14
引用・参考文献	
第3図 遺構全図	図版13 遺構写真
第4図 遺構実測図	図版14 遺構写真
平坦面I-VI・平坦面I-VII・平坦面I-VIII	図版15 遺構写真
第5図 遺構実測図	図版16 遺構写真
平坦面7・盛土1・盛土2	図版17 遺構写真
第6図 黒川地区周辺遺跡(笠場関係)分布図	図版18 遺構写真
	図版19 遺構写真
図版	図版20 遺物写真
図版1 真興寺跡 周辺航空写真	図版21 遺物写真
図版2 遺物実測図	図版22 遺物写真
図版3 遺物実測図	図版23 遺物写真
図版4 遺物実測図	図版24 遺物写真
図版5 遺物実測図	図版25 遺物写真
図版6 遺物実測図	
図版7 遺物実測図	付図
図版8 遺構写真	付図1 遺構実測図
図版9 遺構写真	平坦面1-I (本堂跡) ~ V・平坦面2
図版10 遺構写真	付図2 遺構実測図
図版11 遺構写真	平坦面3 (塔跡)・平坦面4
図版12 遺構写真	平坦面5 (堂跡)・平坦面6

I 遺跡の環境

上市町黒川真興寺跡は、富山県中新川郡上市町字花岡山に所在する（第1図・第2図・図版1）。上市町は、富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する早月川、上市川、白岩川に沿って東南から北西にのびる町である。西は県都富山市、北は滑川市、南は立山町に接し、西側は標高2,998mの鷲岳をはじめとする北アルプスの山々が連なる。

遺跡の所在地である黒川は市街地の北東にあり、上市川の支流、郷川の左岸標高30m前後にあるが、真興寺跡は滑川市との境界に接する谷の最深部、標高120mの山中に占地する。中世墳丘墓群である上山古墓群は本遺跡の南東約500mにあり尾根づたいにたどれば十数分でたどり着ける。また、遺跡の南下200mには真言寺院の本覚院、南東約400mには日枝神社があり周辺が、真言又は密教の道場であったことを色濃く示す地域である。

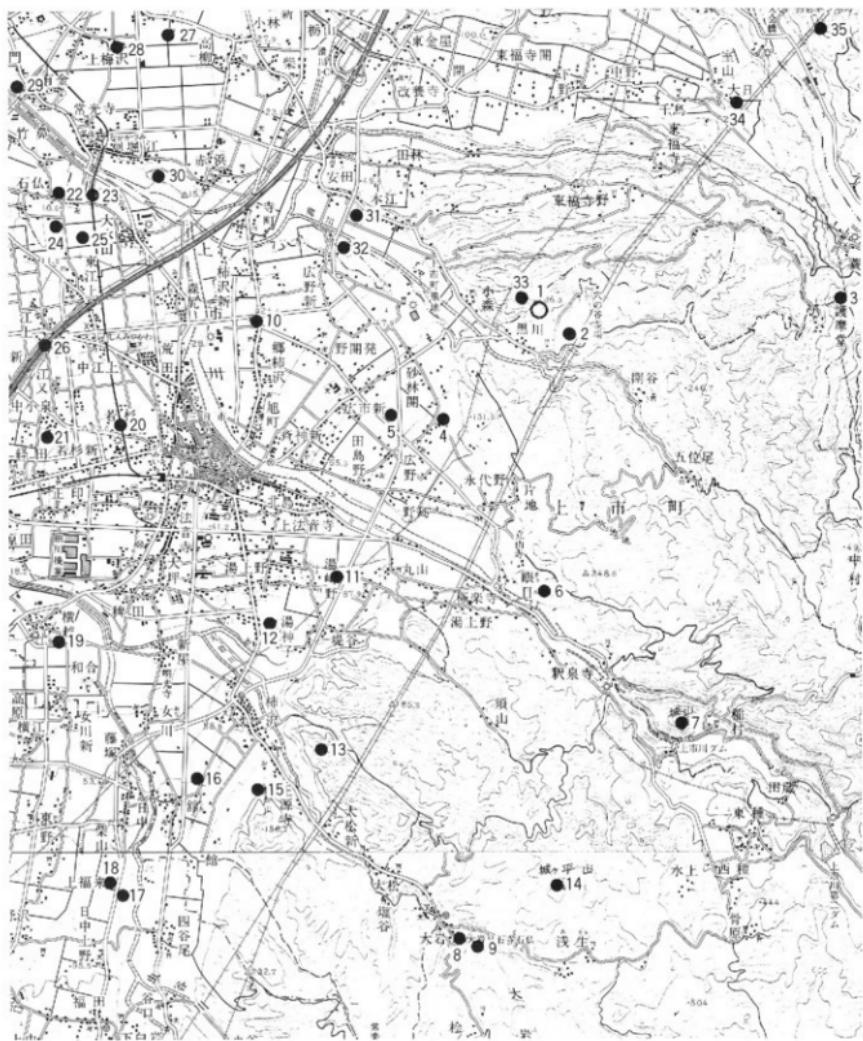
前述の本覚院の寺伝によれば、本覚院は、享保7年（1723）に僧長玄によって開かれた。それ以前は花岡山に真興寺があつたが、富山に移転したためその跡を継いだといわれている。真興寺は、寛和2年（986）に真興上人によって本覚院裏手の山中（俗称：古寺）に開かれた。真興上人は、寛和2年に弘法大師止錫の地、護摩堂村弘法堂を参拝の帰り、麓の黒川に立ち寄り、この地を八正道を宣布するにふさわしい地（八峯八谷・八峯巡台の地という）であるとして庵を結んだ。これにより最盛期にはここを中心に円念寺・淨土寺・正等寺・開谷（カイダン）には源内坊・奥野坊・作内坊・奸田坊などができる信仰の中心になったと言われる。弘法大師ゆかりの地「護摩堂（ゴマンドウ）」弘法堂は、黒川の立地する谷の最深部、標高約400mにあり遠く能登半島や富山湾を一望できる景勝の地で弘法大師が止錫し湧き出たといわれる弘法の清水は民間の信仰を集めている。

開山の真興上人は東密小鳥流の祖真興僧都のことと考えられる。東密36流派の中でも筆頭の高僧で、中興期の高野山（11世紀初頭）の高僧、祈願上人を師事し南院の建立を行ったといわれる。また大和壺坂寺の大門などの建立などの事業も手がけた。僧都は寛弘元年に入寂したといわれるが、南院の建立と相前後する時期に真興寺の開山が有ることから真興寺が、密教又は真言宗の寺院であった可能性がかなり高い。

真興寺周辺の地域には、今回の調査の一環として行った分布調査・簡易測量調査の結果数多くの平坦面を確認した。特に本覚院裏手の平坦面、日枝神社裏手の平坦面は、規模も大きく10世紀前後の遺物も多く検出されることからこの地がかなり以前から何らかの目的で利用されてきたことが伺われる。又、本遺跡の北東上標高170mに小森城跡がある。この城は真興寺跡を見下ろす位置にあり興味深い。遺跡の北東の山中を抜けると「穴の谷靈場」がある。ここは、もとは行者窟で、本遺跡から十数分でいける距離である。このことから周辺一帯は、密教の修行道場もしくは真言宗の靈場であったことがうかがわれる。

町内及び郷川・白岩川周辺の古代から中近世の遺跡としては、市街地の北東に真言宗の古刹「大岩山口石寺」がある。この寺院は北陸有数の真言寺院で、開基は奈良時代まで遡るといわれる。本尊は不動明王で磨崖佛として国指定文化財として指定されている。また裏山の京ヶ峰には12世紀初頭の経塚があり、経筒及び外容器が出土している。

東には、曹洞宗の眼目山立山寺（眼目山旧開山堂遺跡、鎌倉後期）や、日中玉橋経塚・日中東経塚、南北朝期から戦国時代まで中新川一帯に勢力のあった土肥氏をはじめとする豪族の城や居館跡（養輪城跡・稻村城跡・郷柿沢館跡・柿沢城跡・茗荷谷山城跡・郷田砦・弓庄城跡・千石山城跡・有金城跡・堀江城跡・堀の内城跡など）、文献上古代から中世に登場する堀江保・小森保あるいは堀江莊に関連するとみられる遺跡（江上B遺跡・東江上遺跡・上梅沢町遺跡・本江馬場田遺跡・横越遺跡など）数多くの遺跡がみられる。これらの遺跡をバックボーンとして真興寺が成立したものとみられこれらの遺跡との関わりの中でその消長があったものと考えたい。また、本遺跡の立地から尾根づたいに立山信仰との関連も十分に考えられ、平野部の遺跡との関連・山間部の城や寺院との関連も十分視野に入れおかなければならず、中新川地区全体の中世のあり方を考える必要がある。



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/50,000)

1. 真興寺跡遺跡
2. 黒川上山古墓群
3. 製輪城跡
4. 広野D遺跡
5. 広野C遺跡
6. 眼目山旧開山堂遺跡
7. 稲村山城跡
8. 日石寺磨崖仏
9. 大岩京ヶ峰経塚
10. 郷柿沢館跡
11. 湯崎野西遺跡
12. 湯神子B遺跡
13. 桃沢城跡
14. 荷谷山城跡
15. 郷田砦
16. 弓庄城跡
17. 日中玉橋経塚
18. 日中東経塚
19. 橫越遺跡
20. 若杉神田遺跡
21. 中小泉東遺跡
22. 石仏遺跡
23. 石仏鳴町遺跡
24. 石仏南遺跡
25. 大永田西遺跡
26. 江上B遺跡
27. 上梅沢町跡
28. 上梅沢町跡
29. 有金城跡
30. 堀江城跡
31. 本江馬場田遺跡
32. 鶴山砦跡
33. 小森館跡
34. 堀の内城跡
35. 水尾南城跡

II 調査に至る経過

上市町黒川地内では、平成5年度に農業集落排水事業の管理用道路が計画された。しかし当該地区には上山古墓群の存在が知られており、事前の発掘調査が行われた。調査が進む中で、本遺跡が全国でも調査例の少ない中世墳丘墓で、墓数も40基を上回るきわめて良好な遺跡であることが明らかとなった。これを受け上市町教育委員会は、上級機関の指導のもと、県文化財保護審議委員添農氏・奈良大学学長水野正好氏に現地視察をお願いし、保存に関する意見をいただいた。この意見を元に、町当局と再度協議を重ね、地元黒川地区からの保有要請もあり、全面保存の方向で合意した。その後同地内は平成6年12月8日町指定史跡として指定され、平成7年度には公有地化も図られた。平成8年度から、黒川上山古墓群の保存と一般公開のための資料収集を目的として周辺調査を行っている。

III 調査の経過と層序

第1次調査（平成6年度本調査）

平成6年5月13日から同年7月27日までの延べ72日間で実施した。調査対象は1,500m²で、このうち道路が計画された部分について遺跡の内容を確認した。

調査では、墳丘墓19基などの遺構、珠洲焼の蔵骨器、土師質土器（かわらけ）などの遺物が確認された。遺構と共に伴する蔵骨器・土師質土器は13世紀代のもので、この墓群の造営時期もほぼその年代に比定された。また、調査地区以外の部分においても16基以上の墳丘が視認され、全体で39基以上の墳墓が存在し、極めて良好に残存していることが明らかとなった。

第2次調査（平成6年度試掘調査）

平成6年9月9日から9月22日までの延べ11日間で県補助金を受けて実施した。対象は古墓群東側の山林約5,000m²で、道路方線の変更に伴う事前の試掘調査として実施した。平成9年度の調査域はこの部分にあたる。

第3次調査（平成8年度本調査）

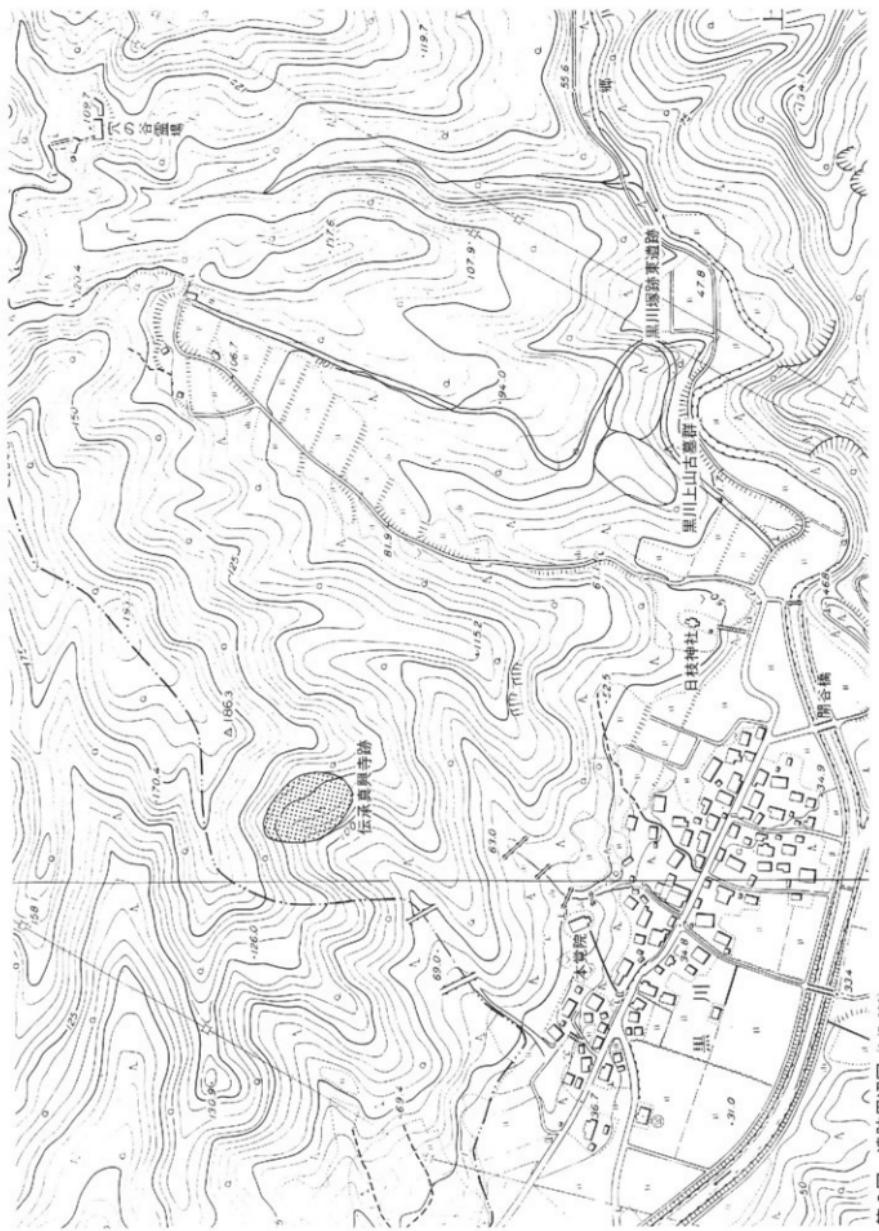
平成8年11月7日から同年12月17日までの延べ25日間で実施した。対象は平成6年度調査地区的南西で16基以上の墳墓が視認されていた部分、約1,500m²で遺跡の内容を確認した。

その結果、墳丘・集石・五輪塔など45カ所の埋葬施設を発見し、全体で70カ所の埋葬施設を持つ墓群であることが明らかとなった。出土遺物は、珠洲焼の蔵骨器・輸入磁器・土師質器である。また1次調査では1基しか発見されなかった五輪塔が、元位置を保つもの2カ所を含めて6カ所で発見された。なお調査は、国庫補助金・県費補助金を得て上市町教育委員会が行った。

第4次調査（平成9年度本調査）

平成9年8月21日から同年10月7日までの延べ32日間で実施した。対象は古墓群東側の平坦面で、約5,500m²で遺跡の内容を確認した。

その結果、平安時代のものと考えられる墳丘墓6基、平坦面10、掘立柱建物1、石列1、礎石跡5、石垣遺構1カ所、参道ないし墓道1カ所を検出した。遺物は明確に遺構に伴うものは検出されなかつたが、8世紀から12世紀までの須恵器片多数を出土、併せて繩紋土器、硬玉製品なども出土した。調査は、国庫補助金・県費補助金を得て上市町教育委員会が行った。



第2図 遊跡周辺図 (1:5,000)

第5次調査（平成10年度本調査）

平成10年10月8日から平成11年3月31日までの延べ34日間で実施した。対象は黒川地区山中の旧真興寺跡と伝承されている平坦面で、約3,200m²で遺跡の内容を確認した。

その結果、本堂跡・塔跡・堂跡と考えられる基壇・礎石・盛土状遺構・池と考える窪み・石敷・山門と考える石段と石垣・湧水地・横穴・大小様々な平坦面などを確認した。遺物は土師器皿・須恵器・珠洲焼・越中窯戸・唐津などである。時期によって遺物の量に差はあるが、9世紀から18世紀までの遺物を検出した。また今年度は、黒川地区山中の分布調査を行い、大小様々な平坦面を確認した。

なお調査は、国庫補助金・県費補助金を得て上市町教育委員会が行った。

層序

遺構は、表面の落葉・雑草・腐植土（5～10cm）を排除することによって検出される。後世、畑として利用されており所々に削平を受けている。また畑として利用した際に拾い集めたと考えられる石積みが見られ、石の移動が伺える。しかし基壇状の高まりなどは確認でき、礎石も移動されているが周辺で確認できる。このほか昭和30年代まで炭焼窯が作成、利用されており、そのための掘削も見られる。遺構面は黄褐色土である。

IV 調査結果

1. 遺構（第3～6図 付図1・2 図版8～19）

真興寺跡は、標高約135mから125mの山中に占地する。谷地形の最深部に入為的に削平された平坦面が大小11カ所、形成されており各平坦面に基壇状の高まり5、礎石建物3、集石9、石列・盛り土・池状の土壤などが検出された。遺跡のある山中と麓の黒川集落との比高差は、約100mで谷の開けた県道からの直線距離は、約400mでかなり急峻である。真興寺跡に向かう道は、真言宗の本覚院裏の道から尾根伝いに参道があり近年まで畑作や炭焼きの為の道として利用されていた（第6図）。

寺域と考えられる部分は総面積約3,200m²で、そのうち平坦面の総面積は約1,800m²であり、かなりの開削が行われている。

調査地区は当初大きな平坦面のある部分のみを対象としていたが、周辺に様々な平坦面や遺構が発見されたため全体像を明らかにすることを主目的とし個々の遺構についての発掘は次年度以降に行うこととした。この為以下の説明は現段階での観察結果であることを申し添えたい。以下平坦面ごとに説明を行う。

平坦面1（第3・4図、付図1、図版10・11・12・16）

平坦面1は、今回の調査で最も規模の大きいもので約1,300m²を計る。説明のためこの平坦面を基壇状の高まりなどで平1-I～Ⅵの7カ所に区分して述べる。

平1-Iは、X79560～79580、Y21060～21090に位置し、基壇状の高まりに築かれた礎石建物を検出した。基壇は、周辺の平坦面から約50cmの高まりで築かれている。後世の畑作などの土地利用からほとんどの礎石は現位置を保っていないが、1カ所で現位置を保つ礎石と周辺に根石を検出、最終的に確認できた建物の規模は、5×4間、ないし4×4間で柱間約2.7mの比較的規模の大きい礎石建物として復元できるものと考えた。建物の向きはN45°Eで後述する山門と考えた石段の位置から正面は南東側である。ほぼ寺域の中心にあることから、本堂・金堂などの中心施設と考える。根石から出土した土師質の土器片は11世紀から16世紀代までかなりの年代幅があり明確ではないが、立て替えなどの可能性も考慮しなければならない。

平1-IIは、平1-Iの北隅に隣接して築かれた基壇状の高まりである。後世の畑作でやや削られた感があり高まり

も30~50cmとやや低い。建物は今回の調査では検出できなかったが、何らかの施設があったものと想定している。

平1-Iは本堂のある平1-Iの南東側の地区である。この部分は北西隅に池状の土壌2カ所と石敷き溝と考えられる石列2カ所等を検出しており庭などを想定している。池1は、本堂奥の柱列の右側、平坦面1の北東隅にある。規模は、北東南西方向で3m、北西南東方向で2mあまり大きなものではないが、現在も水が湧き出ている。石敷きはこの池1の南西に作りつけられており、幅1m、長さ2mである。石は東西方向に整然と並べられているが、やや石と石の間隔があけられており、排水を考慮した施設である。この石敷きから本堂に石列1が見られる。この石列は本堂の礎石部分でとされるが石が南北方向に並んで続いているようであり、山門横の溝跡に続くものと考えている。池2は、池1の南側約3mの位置にあり径約3mの不正円のものである。深さは約90cmであり、水が湧き出ているものではないが、池1が、雨水などで増水した際にそれを受ける形で配されている。池1・池2は底面に石が配されている。平1-IIは、本堂の柱列2列目横でやや傾斜し北西側と南東側に二つの平坦地を持つよう、池周辺に石が散乱するように分布している。石列2はその中にあり何らかの建物が配されていた可能性がある。集石5は、平1-IIの南隅に位置する。径約2mの範囲に固められており後述する参道を見下ろす位置にある。図上に表現はないが、この集石の左に山桜が植栽されている。五本の幹に分かれているが、高さ約15mの大きなものである。遺跡の年代と関わるとは思われないが、高野山などの寺院の古絵図などに桜が描かれていることを思うとこれも何らかの関連があるものかもしれない。

平1-IVは、本堂の正面、南西側に当たる部分である。平1-IIとは、溝跡により区分けした。約120m²の広さがある。全体に石が散乱するが、礎石に使われていたと思われる扁平な石や集石なども見受けられる。本堂のある平坦面とは約50cmの段差がある。この段差から約8m離れて本堂正面の柱列とほぼ並行に石列・石垣が築かれている。石垣・石列の全長は、約15mで、そのほぼ中央に石段が築かれている。石段は、幅約3m、長さ約2mで北西側に長さ1m、幅50cm前後の石で石列が築かれ南東側は石垣で区切られている。石段は、4段で一部石が抜け落ちているが段の小口に整然と並べられている。石列・石垣の状況から山門を想定した。この部分での平1-IVと平2との段差は、約1mである。石段の位置は本堂中央には対応せず、本堂の1間分右側にずれており、石段も本堂中央に向くよう斜めに配されている。本堂と石列・石垣のほぼ中央に集石2・3がある。参拝者は、石段からこの集石の間を通り本堂正面に向かうことになる。神社仏閣に見られる魔をさける思想の現れと考えた。山門右側の石垣内と左側の石列下に五輪塔の火輪が検出されている。形状から15世紀後半のものと考える。本堂北西端の集石1は、方形で長さ幅とも約3mのものである。本堂関連施設の可能性が高い。集石4は、径約2mの範囲に石が固められている。集石6は、前述の集石5とはほぼ同規模の径約2mの範囲に固められており両者の距離は、約26mを計る。その中央に石段があることから寺域区画のものかもしれない。

平1-Vは平1-IIの北西側で基壇状の高まりの下に当たる。後世の畑作の影響がかなりあり畠の跡などで掘削された跡が数多く残る。また、周辺に配されていたと考えられる礎石や集石も固められておりほとんど遺構と認識できるものは検出されなかった。ただ、一部地山に食い込んだ50cm前後の石があり何らかの遺構があったものと考えられる。

平1-VI、平1-VII、平1-VIIIは、本堂北西側の基壇状の高まりである。高さは、50cm前後でいずれも山際に作りつけられており規模はそれぞれ5×10m・3×8m・5×10mである。VIとVIIは、磁北にほぼ並行だが、VIIIは、本堂とほぼ並行で同時に存在した可能性が高い。このことから、真興寺跡は、2時期以上の遺構が存在する可能性が高い。いずれの平坦面にも大小さまざまの石が散乱しており今後の調査で何らかの施設が検出できそうである。

平坦面2（第3図・付図1、図版12・15）

平2は、前述の平1-IVの南西で山門前面の平坦地である。前述した山門北西の石列で区画され、右側が参道及び山門前の広場となるようである。参道は、この平坦面南東に伸びており尾根道へと続く。山門北西の比較的大きな石

で築かれた石列は、その奥の平坦面への行く手を阻むように配されており、さらにその奥に平1-IVに向かう石段もしくはスロープ状の部分があり、はじめはこの部分が参道であった可能性がある。このスロープ状の部分の西には、石垣とも石積みとも付かない石が配されているが、この部分がどのように機能していたかは定かではない。いずれにしてもこの部分でも本遺跡が2時期以上ある可能性を示すものと考える。

平坦面3（第3図・付図2、図版9・13）

平3は、平1の南東に位置し、本堂のある平坦面から約3m高まった削平地である。面積は、約110m²である。ここには、基壇状の高まりが設けられ方形の礎石建物が検出された。基壇は、底面で約6×6m、上面で約4.4m×4.4mで、この上面に3×3間の方形の柱建物を復元できる。柱間は真芯で約1m+1.3m+1mで礎石に一部欠落が見られるものの非常に整然とした作りである。礎石に使われている石は、外柱が40cm前後、内柱が20cm前後の凝灰岩である。基壇状の高まりの端には上面の礎石には対応するように20cm前後の石が並べられており縁なしし庇などが考えられる。建物の規模、外柱と内柱などから三重塔ないし多宝塔など塔があったものと考えたい。とするならば、外周の石列は縁を設けるための礎石と考えられる。また基壇状と表現した部分も亀腹など塔の土台となる部分と想定される。この南東・北東側は崖が迫り縁付きの塔にしてはやや狭間に感じられるが、崖が崩れ落ちていることもあり今後この部分も明確にしていきたい。この建物の正面は、本堂側で、そこに集石7がある。集石は径約2mの不正円で周辺にも石が散乱している。また平3の北西側の等高線から地中に階段などの遺構が存在する可能性も秘めている。本堂南東端の柱列と塔北東端の柱列は、一直線上に並び距離は、約21mである。本堂の柱間が、2.7mであるところから、この柱間の約8倍の位置に築いたことになる。

平坦面4（第3図・付図2、図版9・17）

平4は、平3の北東に地続きにある。後世の掘削により一部欠落しているが元は、同一面と認識されていた可能性が高い。ここは、池1の東側で池周辺を庭とした場合、借景の部分となる。平面上に扁平な石があることから、何らかの施設があった可能性がある。平1との比高差は、約2.5mである。

平坦面5（第3図・付図2、図版9・14）

平5は、平1の南東、塔のある平3の東側直上に位置する削平面である。面積は、約60m²で、平1の本堂跡との比高差は、約10mで今回調査した地区の最高所にある。この平坦面の南東端に礎石建物を検出した。礎石は、1×2間分を検出したが、その奥に石が散布することから、最終的には、2×2間の建物として復元した。棟の向きはN-58°Eで、本堂・塔に比べやや東にふれる。礎石は、約30cm前後の丸い扁平なものを使用し、柱間は、北東南西方向で約1.3m、北西南東方向で約1.5mで北西南東方向にやや長い建物である。立地などから、お堂などの建物を想起した。平1の本堂からは直線距離で約35.1mで本堂の柱間の約13倍の距離にある。この堂の北東に一見土砂崩れと見間違う傾斜がある。表土を除去してはいないが、石段となる可能性がある。ここからは、富山平野の一部さらに能登半島まで一望できる。寺域の中でも重要な地区と想像される。

平坦面6（第3図・付図2、図版9）

平6は、平4の東、比高差約4mに位置する。15m²程度の小さな削平面であるが、平5から迂回するように幅30cmの小道が作りつけられている。地山に20から30cm前後の扁平な石があることから、東屋のような小さな建物が建つ可能性がある。

平坦面7（第3図、第5図、図版16）

平7は、本堂背後に広がる平坦地である。一部に昭和初期に炭焼き窯として利用された部分があり必ずしも元の地形を残しているわけではないが、おおむね幅5m長さ31mで約155m²の広さがある。本堂のある平1とは比高差約1m前後である。さらにその北東比高差約1.5mに土礫頭様に築かれた、盛り土1・2がある。この盛り土の周囲は溝状に

割り取られ通路としても機能していたようではほぼ同一レベルで平1-II背後まで伸びている。盛り土1には1辺約1.5mのほぼ方形の巨石が1個おかれている。寺域を示す結界かもしれない。

平坦面8・11（第3図、図版15・17）

平8は、平2の直下、山門の右後の南西に位置する。平2との比高差は、約5.2mである。面積は、約30m²程度の小さな面である。ここには、径約2m、深さ約90cmの土壙がある。この土壙の周辺には、人頭大から拳大の石が散乱し、中に15世紀末のものと考えられる五輪塔の火輪が出土している。堀片に堀部が残ることから墳墓であった可能性が高い。後代、真興寺が、富山に移転した際に掘り出されたものかもしれない。この平8の西に平11がある。山際に横穴が認められるが、詳細は次期調査にゆだねたい。

平坦面9（第3図、図版17）

平9は、平2の西側直下、平8の北西隣に広がる平坦面である。平坦部の面積は約190m²で平1との比高差は、約4.5mである。この平坦面には、集石8・9・10がある。集石は、径約2m前後のもので高さ60cm程度に積み上げられている。積み石墓となるものと考えた。16世紀後半の越中瀬戸が含まれる。この平面は、南側で平8につながるが、ここに向かう部分に人頭大の石が一部列をなすように並べられており、通路となっていたものと考えらる。直上の平1・2などのように結びつくか調査が必要である。

平坦面10（第3図、図版17）

平9の北側に谷を隔てて平10がある。面積は、約50m²で平1との比高差は約5mである。ここでは今のところ遺構は検出していないが、北側山裾に湧水地点を確認した。この湧水は、最近まで薫にあった本院で利用されていたとのことで、誘水ようのパイプが取り付けられていた。水は、四季を通じてとぎれることが無く、現在も湧きだしている。

以上、遺構について今までに判明した点と想定した建物について述べたが、調査が、寺域全体の把握に主眼をおいたため個々の遺構に付いての分析と調査が不十分である。次年度以降試掘を含め再調査を行う予定である。しかしながら、中世の山岳寺院で寺域約3,200m²にも及ぶ大規模な遺構が確認され、上山古墓群とのつながりもあるものと見られるところから黒川から護摩堂に至る谷全体が、大きな宗教空間であった可能性が再確認されたことは大きな成果と考える。今後さらに周辺部の調査を継続する必要がある。

黒川集落背後の山間部の分布調査について（第6図・図版19）

真興寺跡の調査に平行して寺域から上山古墓群に至る黒川村背後の山間地の分布調査と簡易測量を実施した。調査は、富山大学人文学部国際文化学科考古学研究室の全面的なバックアップの下、調査担当者及び富山大学教授宇野隆夫氏の指導で行った。調査は、対象域をおおむね尾根筋ごとに4地区に分けそれぞれに人為的に作り出された平坦面の有無と、真興寺跡背後の山地の山頂部に広がる平坦面の観察を5班に分けて実施した。その結果、大小5カ所の平坦面を確認した。またこれらの地区がどのように結びつくか徒歩によりその距離感を確認した。

平1は、調査区最高所の標高200m前後の地域である。真興寺跡背後の山の山頂部分で、真興寺跡から5分、行者窟である穴の谷靈場からも約8分程度でたどり着ける。ここには山頂部とその下の尾根上に2段の平坦部を確認した。山頂部が182m²、その下の尾根が1,300m²とかなり広い。山頂部には、道と見られる疊みが、南東から北西に約20m確認される。

平2は、平1の南で標高110m付近にある。平1からは3分程度の距離感である。250m²と50m²の2段の平坦面が確認される。周辺に径2m前後の高まりが確認される。

平3は、平2の南西で標高100m付近にある。谷の最深部にあり約50m²の面積である。この部分には、集石が3カ所程度確認され、集石墓と考えた。

平4は、上山古墓群の西、標高約50mの日枝神社の背後に広がる地域で水田畠も含めて大小16にも及ぶ平坦面が確認される。このうち山地を開削して作り出されたと見られる平坦面が2カ所あり石列・集石がいくつも確認された。日枝神社を含めてかなり大規模な施設があったものと考えられる。面積は最も大きい物で約3,000m²小さい物で50m²であった。

平5は、本覚院東の標高50m付近の平坦面で現在畠地となっている部分である。5カ所の平坦面があるが、面積は、約3,000m²のものが2カ所、50m²が2カ所、160m²が1カ所である。付近からは、9世紀代から10世紀代の須恵器や土師器片が多数表面採集できる（図版7・25）。また、16世紀代のものと考えられる径約30cm高さ約50cmにも及ぶ五輪塔の風空輪が検出された。地元の方の話では、昔ここに神社があったという言い伝えがあると言う。

これらの平坦面は、真興寺跡・上山古墓群・穴の谷、日枝神社を含めすべて平1のある山地から尾根あるいは谷を介して20分程度でたどり着け相互に関連するものと考えられる。八峯八谷あるいは八峯蓮台の地を裏付ける結果となった。今回の調査は、黒川集落背後の山間地に限定した調査であったため、今後さらに地域を広げ黒川から護摩堂に至る谷全体の詳細な分布調査が必要である。今回の調査から谷全体が大きな壇場であった可能性が大きく、このような平坦面あるいは遺構が発見される可能性が高い。

2. 遺物（図版2～7、図版20～25）

調査により検出した遺物は、土師器・須恵器・珠洲焼・越中瀬戸・唐津・鉄製品などである。ほとんどの遺物は、表上を排除し遺構面を検出する際に出土した。遺物は、時期によって量に違いがあるものの、9世紀から18世紀までの時間幅をもっている。しかし、旧真興寺が9世紀から18世紀まで継続して存在したとは考えにくく、出土遺物もすべての時期のものが見られるわけではない。以下、遺構ごと、図版ごとに遺物の特徴を述べる。

本堂出土遺物（図版2・20・24）

図版2の1～35、図版20の①～⑨は本堂からの出土である。図版2の1～14は土師器である。1～9は土師器Ⅲの口縁部で、口径は8～15cmである。1・2・4は、内外面に炭化物が付着する。15～16世紀のものと考える。このうち1・2は、本堂の根石検出部分からの出土である。10・12・14は土師器皿の底部である。いずれも底部は回転糸切りであるが、摩滅が著しい。12世紀代のものと考える。11の底部は回転糸切りである。底径は4.4cmを測る。13は蛇の日高台で、高台は低く、断面三角形である。高台径5.4cmを測る。11・13は11世紀代のものである。なお11・13は本堂の根石検出部分からの出土である。15～20は須恵器である。15は杯蓋で、内外面縁轆回転撫で調整を施し、口縁端部は丸くおさめている。16は皿の底部である。高台は断面三角形で、内外面回転撫で調整が施される。17～20は甕の体部破片である。17・18は外面に擬格子状平行叩き、内面に同心円紋を施す。19は外面に擬格子状平行叩き、内面に平行線紋、20は外面に平行叩き、内面に扇形紋を施す。このうち17は、本堂の根石検出部分からの出土である。15～20は9世紀代のものと考える。21・24は越中瀬戸の皿である。24は体部下半から口縁部まで直線的にのび、内面は全面に、外側は体部に鉄釉を施す。18世紀代のものと考える。22・23は無釉の陶器である。25～28は越中瀬戸である。25の丸碗は体部下半に丸みを帯び、鉄釉を施す。削り出し高台で、高台部分は無釉である。底部は中心に向かって円錐状に削られ、高台の外側端部は面取りされている。26は蓋と考えられ、鉄釉を施す。27は内外面鉄釉が施される。壺の口縁部で口縁端部が肥厚する。28は擂鉢で、口縁端部は屈曲して立ち上がる。体部は縁轆撫で、全面に鉄釉が掛かる。鉢日は左回りに、幅2.4cmに10条1単位で施される。29は口径16cmの皿である。30は唐津の擂鉢である。口縁部外側が丸く肥厚し、口縁部内外面に鉄釉を施す。口径32cmを測る。18世紀代のものである。31は瓦器で、近世のものと考える。32～34は鉄釘である。いずれも鋸がひどいが、32は丸釘である。35は拓本では読みにくいが、寛永通寶である。この他本堂からの出土遺物には、図版20の①～⑨がある。①・②・⑤・⑥は土師質の破片である。①は内外面赤彩

が施された皿または碗の破片である。③・④は須恵器片である。⑤は壺の口縁部、⑥は壺の頸部と考えられる。⑦は、図版2の30と同一個体と考えられる。唐津の擂鉢で、口縁部外面が丸く肥厚する。鉢目は細い。18世紀代のものである。⑧は底地不明の陶器の皿で、灰釉を施す。⑨は青磁片で、本堂前面の石列付近からの出土である。

池周辺出土遺物（図版3・21・24）

図版3の1・2は土師器皿である。1は池1南西側の石敷から検出した。口縁部に横撫でを施し、端部を上方へわずかに揃む。口径は9cmを測る。外面に炭化物が付着する。2は池2の肩から出土した。口縁部に横撫でを施し、口縁端部を上方へ小さく揃んでいる。揃み上げた端部の内側に溝が走る。口径は9cmを測る。1・2は、16世紀代のものと考える。3・4は池1の南側から出土した。3は越中瀬戸の皿で、体部下半から口縁端部まで直線的である。内面は全面に、外面は体部に鉄釉を施す。口径10cm、底径4.5cmである。18世紀代のものと考える。4は越中瀬戸の壺である。底部外面以外の全面に錫釉を施す。轆轤目が明瞭で、底部は回転糸切り未開整である。口径11.4cm、底径12.8cmである。5～7は右列1周辺からの出土である。5は珠洲焼の擂鉢である。破片が鉢日の途中で割れているため、原体の幅、条数は不明であるが、残存部分で1.1cmに4条を数える。15世紀代のものと考える。6は花瓶の口縁部で、灰釉が施されている。轆轤目が明瞭で、口径9.2cmを測る。7は6と同一個体と考えられ、底径7cmである。

平坦面1-Ⅲ出土遺物（図版3・21）

図版3の8～10は土師器皿である。8は口径8cmで、外面に炭化物が付着する。9は口径11cmである。10は口縁部を横撫でし、口縁端部を上方へ小さく揃む。口径は12.2cmである。この他、平坦面1-Ⅲ出土の土師器皿は、図版21の①・②である。いずれも15～16世紀代と考える。11は須恵器の壺である。口径21.5cmを測る。口縁部は端部が上下に拡張する。外面に自然釉がかかる。この他須恵器は、図版21の③で、杯蓋である。口縁端部は丸くおさめ、調整は轆轤回転撫である。須恵器は9世紀代のものと考える。12は珠洲焼の擂鉢である。鉢目は密度が高く、2cmに7条を施す。15世紀代のものと考える。14・15・17は越中瀬戸の皿で、体部下半から口縁部まで直線的にのびる。内面は全面に、外面は体部に鉄釉を施す。18世紀代のものと考える。13・16・18は無釉の陶器の皿である。19は口径8cmで、内外面錫釉を施す。越中瀬戸の壺である。20は筒形の碗である。鉄釉を施す。21は越中瀬戸の匣鉢である。轆轤目が明瞭で、口径は18.3cmである。外面に錫釉が掛かる。22は越中瀬戸の擂鉢である。口縁部が内側に折り返され、内面に凸帯をもつ。端部上面は窪んでいる。錫釉が施され、口径は28cmを測る。23は鉢をもら、茶釜かと考える。内外面茶褐色の鉄釉を施す。24は皿で、見込みは蛇の目釉剥ぎである。25は肥前系陶器の皿で、見込みに山水文を描く。底部は無釉であるが、底部以外の全面に透明釉を施す。26は肥前系陶器の皿で、見込みを蛇の目釉剥ぎとする。24～26は18世紀代のものと考える。27は鉄釘である。鋸がひどいが、角釘で、頭部は片側から折り曲げた形態のものである。

溝跡出土遺物（図版22）

図版22の④は、平坦面1-Ⅲ・Ⅳ間の溝をつくる石列から検出された。須恵器で壺の体部と考えられる。外面には自然釉がかかる。

集石1出土遺物（図版4・22）

図版4の1～5は集石1からの出土である。1は土師器皿で、口径8cmである。摩滅が著しいが、外面に炭化物が付着する。2は珠洲焼で、壺の体部破片である。3は越中瀬戸の擂鉢である。鉢目は左回りで、2.3cm幅に12条1単位である。錫釉が施される。4は肥前系陶器の皿で、体部はやや内湾しながら立ち上がる。内面は緑青色の銅錫釉を施し、内底面を蛇の目釉剥ぎする。外面は、体部下半まで灰白色の灰釉を施す。削り出し高台で、高台径は6cmである。17世紀後半から18世紀のものである。5の皿は内堀皿である。高台付近は無釉の削りだし高台で、高台の断面は逆三角形を呈する。見込みに煤が付着する。

平坦面 1 - IV 出土遺物 (図版 4・22)

図版 4 の 6 ~ 12 は、平坦面 1 - IV からの出土である。6 は柱状高台のつく甌である。底径は 4.1cm で、回転糸切りである。12 ~ 13 世紀のものと考えられる。7 ~ 9 は須恵器である。7 は杯蓋で口径 13cm を測る。口縁端部は丸く納める。頂部と縁部の境目に帯状の回転範削りを施す。内面は回転撫で調整である。8 は杯で、口径 12.8cm を測る。底部は回転範削りの後に撫でを施す。その他の部分は回転撫で調整である。9 は甌の体部破片である。外面に擬格子状平行叩き、内面に同心円紋を施す。須恵器は 9 ~ 10 世紀代のものである。10 は越中瀬戸の皿である。内面に鉄釉が施され、底径は 3.4cm である。18 世紀代のものである。11 は磁器の御仏皿で底径 4.1cm である。呉須で縁が描かれる。12 は細長い立方体に 3 本の線を刻み、3 本の線が刻まれた面の上部と下部を面取りする。また裏面の上部も面取りしている。底部は敲打したような跡を呈するが、他の面は良く磨かれている。重さは 86g である。石材は不明である。この他平坦面 1 - IV 出土遺物には、図版 22 の③・⑦がある。③は土師器片、⑦は唐津の捕鉢で、口縁部外側が丸く肥厚する。

山門出土遺物 (図版 4・7・15・22)

図版 4 の 13 ~ 15 は山門石列部分からの出土である。13 は越中瀬戸の甌である。口径は 13cm で、内外面に鉄釉を施す。14 は越中瀬戸で甌の体部破片である。内外面鉄釉を施す。15 の碗は、外面に 6 条の線が引かれ、内外面鉄釉が施されている。16 は山門西側隅の石垣からの出土である。珠洲焼で甌の体部破片である。図版 7 の 2 ~ 4 は五輪塔の火輪で、石段の左右から出土した。2 は石段東側、3・4 は石段西側からの出土である。軟質な凝灰岩である。いずれも 1 辺 14cm ほどで、軒反りは小さい。

平坦面 2 出土遺物 (図版 4・21・22)

図版 4 の 17 ~ 20 は平坦面 2 からの出土で、すべて越中瀬戸である。17 は皿で、内面に鉄釉を施す。18 世紀代のものと考える。18・19 は丸碗である。体部下半は丸みを帯び、18 の口縁部は直線的に立ち上がる。削り出し高台で、高台断面は逆三角形である。体部には鉄釉を施す。20 は甌で、内外面に鉄釉を施す。口縁端部は肥厚する。

平坦面 1 - II 出土遺物 (図版 4・22)

図版 4 の 21 ~ 23 は平坦面 1 - II からの出土で、土師器皿である。21 は口径 10cm、22 は口径 9cm、23 は口径 11cm である。21・22 は摩滅が著しい。この他平坦面 1 - II 出土遺物は、図版 22 の①・②・⑥である。①・② は土師器片である。⑥ は小破片だが、内面に緑青色の釉を施す。

平坦面 1 - V 出土遺物 (図版 4・22)

図版 4 の 24 ~ 33 は平坦面 1 - V からの出土である。24 ~ 27 は土師器皿である。口径は 10 ~ 14cm である。25・26 の口縁部の調整は横撫である。口縁端部を上方にわずかに摘み、摘んだ内側に溝が入る。土師器皿は 15 ~ 16 世紀のものである。28 は須恵器で、甌の体部破片である。外面に平行叩き、内面に扇形紋を施す。9 世紀代のものと考える。29 ~ 31 は、珠洲焼の甌の体部破片である。32 は碗と考えられる。輪轂目が明瞭に残り、内外面に鉄釉が掛かる。33 は砥石で、144g を測る。なお平坦面 1 - V 出土遺物には、図版 22 の⑤の珠洲焼片が含まれる。

平坦面 1 - II - V 周辺出土遺物 (図版 5・6・23・24)

平坦面 1 - II 西側角には、後世畑を耕作した際に集めたと考えられる石が積まれていた。この石積みは位置的に、平坦面 1 - II - V の石を中心に集めたと考える。図版 5 の 1 ~ 21・図版 6 の 1 ~ 8 は、この石積みを取り払った際に採集されたものである。以下、図版ごとに説明する。

図版 5 の 1 ~ 6 は土師器皿である。3 は手づくねで、口縁部を強く一段横撫である。6 の底部は回転糸切りである。3・6 は、内外面に炭化物が付着する。15 世紀のものと考える。7 は須恵器で甌の体部破片である。外面に平行叩き、内面に扇形紋を施す。8 ~ 16 は珠洲焼である。8 は甌の口縁部で、口縁部と頸部に櫛齒状工具によって波状文を施す。珠洲Ⅲ期、13 世紀後半に比定できる。9 は甌で、口縁部直下から叩きを施す。珠洲Ⅳ期のものと考える。10 ~ 14

は壺の体部破片、15・16は擂鉢である。15・16は同一個体と考えられ、鉢目は2cmに7条である。15世紀代のものと考える。17~21は越中瀬戸である。17は皿で、体部下半から口縁部まで直線的にのび、内面全面と外面部に鉄軸を施す。18世紀代のものである。18は壺の底部と考えられる。内外面鉄軸が掛かる。底部は回転糸切り、底径は9.5cmである。19は大きな皿の底部と考える。内外面鉄軸が掛かる。20は擂鉢で、口縁端部が屈曲して立ち上がる。内外面鉄軸を施す。口径は27cmである。21は匣鉢の蓋である。

図版6の1・2の皿は、内底面を蛇の目釉刺ぎする。高台は逆三角形状に削り出している。3は皿で内面は緑青色の釉を施し、外面は灰白色の釉を施す。4の碗は草花文を施す。5は簡茶碗の底部である。1~5は肥前系陶器で18世紀代のものである。6は鉢で、口径11.4cmである。3条の沈線を施し、内外面鉄軸を施す。図版6の7と、図版24の①~④は、図版6の6と同一個体と考える。8は唐津の擂鉢である。口縁部外面が丸く肥厚する。口縁部内面には段がめぐる。鉢目溝は細い。鉢目は、5.1cm幅に14条1単位である。18世紀代のものである。

平坦面3（塔跡）出土遺物（図版6・25）

図版6の9・10は平坦面3より出土した。9は越中瀬戸の匣鉢である。体部は直立し、筒状を呈する。輪轂口が明瞭に残り、外面に鉄軸が掛かる。10は鉄製品である。緩く反った板状を呈する。

平坦面5（堂跡）出土遺物（図版6・25）

図版6の11は平坦面5からの出土である。土師器皿で口径は9cmである。外面に炭化物が付着する。15~16世紀代のものと考える。

平坦面6出土遺物（図版6・25）

図版6の11は平坦面5からの出土である。土師器皿で口径は9cmである。外面に炭化物が付着する。15~16世紀代のものと考える。

平坦面8出土遺物（図版6・7・25）

図版6の13~15は平坦面8からの出土である。13は須恵器で壺の体部破片である。外面は擬格子状平行叩き、内面は同心円紋を施す。9世紀代のものと考える。14は越中瀬戸の皿である。内面に鉄軸を施す。15は越中瀬戸の壺である。肩部に耳が付けられている。外面に鉄軸が掛かる。図版7の1は五輪塔の火輪である。1辺10cmほどで、四隅の稜線はほぼ垂直に下りる。この他平坦面8出土遺物には、図版25の①、土師器皿片がある。

平坦面9出土遺物（図版6・25）

図版6の16~19は平坦面9からの出土である。16は土師器皿で、口径9cmである。17・18は珠洲焼の擂鉢である。17の口縁端部は、弱く屈折し丸みを帯びる。端部内面に柳歛波状文を施す。珠洲VI期に比定した。18の鉢目は、2cmに6条を施す。15世紀代のものと考える。19は越中瀬戸で、3足の皿と推定するが、破片のため4足の可能性もある。黒川窯、16世紀後半のものと考える。

廐土（図版6・25）

図版6の20は廐土中より得た。青磁で碗の底部と考えられる。底径は6cmである。

分布調査採集遺物（図版7・25）

図版7の5~21・図版25の②~⑨は、分布調査の際に本覚院裏の平坦面5より採集したものである。図版7の5・6は上師器の碗で内外面赤彩を施す。7~14は碗・皿の底部である。7~10・13・14の底部は回転糸切りである。11・12・15は高台がつく。11の高台は低く、断面三角形を呈する。7・8・13は内外面に赤彩を施す。16は壺の口縁部で、口縁端部を巻き込んでいる。17は壺の頸部である。18~21は壺の体部破片である。18・20・21は叩きと当具跡を残す。図版25の②~⑧は上師質で壺の体部破片である。いずれも9~10世紀代のものと考える。

3. 真興寺跡の遺構配置について

真興寺跡で検出された遺構について若干の整理を行いたい。古代寺院に見られるような正確な伽藍配置はないにしても調査中から、本堂・塔・堂に計画配置の意図が読みとれそうであると考えたからである。

まず、本遺跡の中心施設である本堂と考えた建物の規模は、柱間約2.7m、5×4間で建坪約145.8m²であった。その南西に塔跡と考えた建物があり、規模は、礎石の心芯で1+1.3+1m四方で建坪10.89m²、縁が付く場合基壇幅の石列から6×6mの建物と見ることもでき約36m²の建物となる。このことから本堂は、塔の約4倍の面積の建物となる。又、本堂南東側の正面に当たる柱列は、直線で塔の北西端の柱列とは一直線で結ばれ、本堂南東端と塔北西端の距離は、18.9mで本堂柱間2.7mの7間分に相当する距離に作られている。堂は、北西方向と北東方向でやや柱間が異なるが、(1.3×2)+(1.5×2)の建物と復元すると建坪は約7.8m²の建物となり、塔の約1/5の規模となる。建物の軸は、本堂・塔とはややずれるが、本堂2列目の柱列が、堂の中央の柱列とは直線で結ばれ距離は約36.5mを計る。本堂の柱間が2.7mであることから、約13.5m分の距離となる。このことからかなり大胆ではあるが本堂から塔・堂の距離は本堂柱間の約7倍と14倍となりほぼ等距離に築こうとしたのではないかと考える。また、建物の大きさは本堂：塔：堂でおむね20:5:1の比率となる。

本堂周辺の敷地を見ると本堂南東の平I-Ⅲは、塔のある平3の崖下で本堂から約9.45m、本堂北西の平I-IIは、基壇状の高まりの上場で約9.6mではほぼ等距離で本堂柱間の約3.5倍である。本堂正面の平I-IVは、本堂から山門とを考えた石列までの距離8.2mを計り、本堂柱間の約3間分に相当する。

平Iの基壇状の高まりのうち、平I-VI・VIIは、他の高まりと軸方向が約45°ずれており、ほぼ南北に平行で、この2つの平坦面が時期を異にする可能性が高い。遺物からの時期決定が今後必要でありさらに詳細な試掘を行う予定である。以上本堂周辺の建物配置と敷地利用についてみたが、寺院施設が、すべて同一平坦面に築かれたものではなく山岳寺院に近い配置をなすことからかなり大づかみな分析と整理に終始した。識者のご意見を伺いたい。



V まとめ

本遺跡についていくつかの検討を試みたが、その中で得られた見解を整理し、まとめに変えたい。

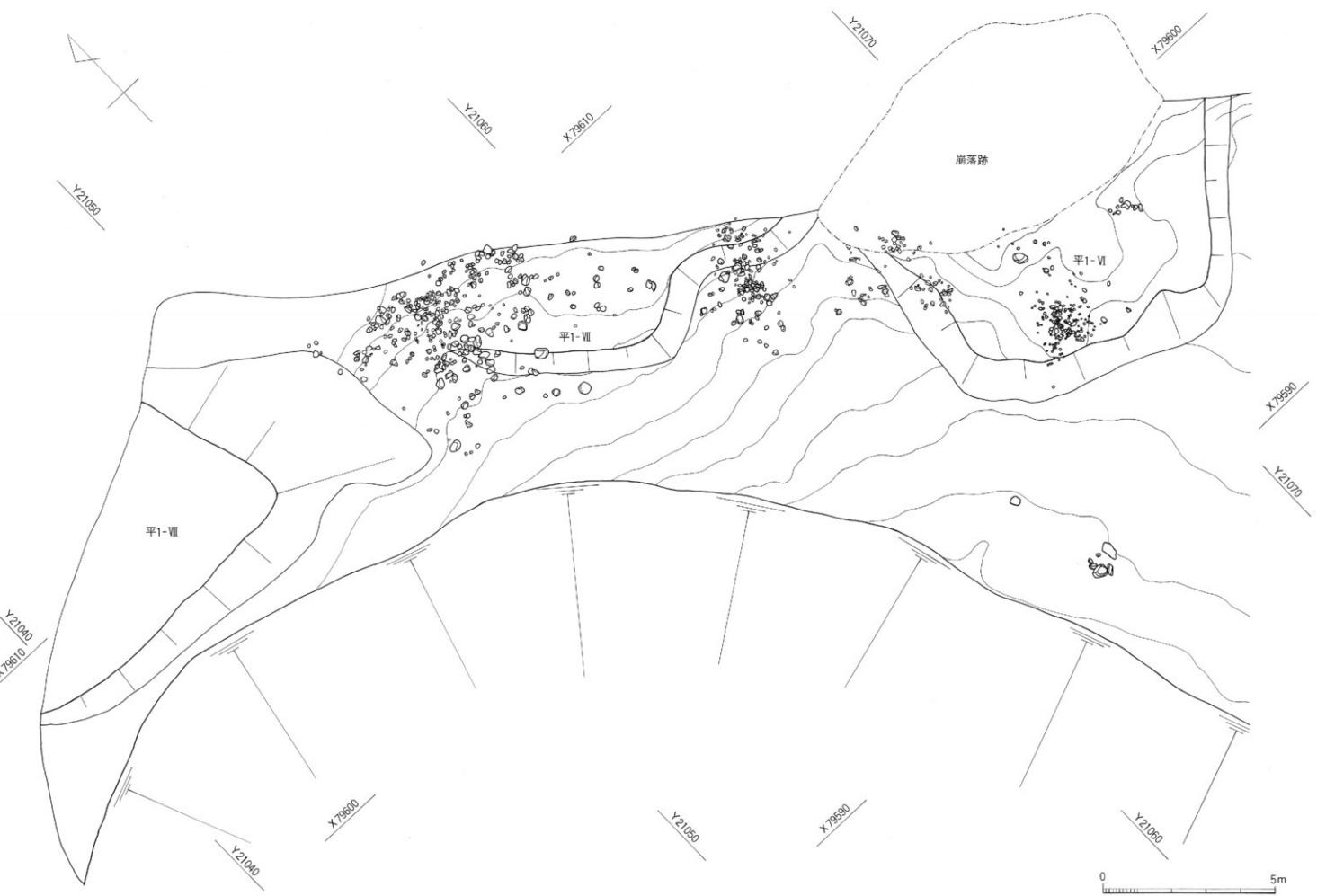
1. 本遺跡は、地元では俗称「フルデラ」と呼ばれる地域であり、古くから寺院があった場所として言い伝えられていた。検出された遺構から山岳寺院であることが確認された。
 2. 標高は、約135mから120mの山中で麓の黒川村との比高差は、約100mとかなりの高所に所在する。
 3. 遺跡のある山地麓の本覚院の寺伝によれば、この寺は、真興寺といい開山は、東密小島流の真興僧都で今から約千年前に開山したという。真興僧都は、中興期（11世紀）の高野山にあっては、南院の建立を手掛けた人物として紀伊国續風上記にある人物で高野山とのつながりも暗示させる。
 4. 検出した部分は、寺域約3,200m²でこの中に大小11カ所の平坦面を確認した。遺構は、平坦面1で本堂跡・山門跡・池跡・墓壇状の高まり・集石・石列、平坦面2で参道跡・石列・集石・石垣、平坦面3で塔跡・集石・平坦面5で堂跡・石段？、平坦面7の背後に盛り土（墓跡か）、平坦面8で土壠（墓跡か）、平坦面9で集石（墓跡か）、平坦面10で湧水地、平坦面11で横穴、と数多くの施設があることを確認した。
 5. 平坦面の標高の最も高いものは平5で約133m、最も低い平11では約114mで比高差19mでかなりの高低差がある。本堂のある平1と堂のある平5の比高差も約10mと大きく山地の形状に合わせ各平坦面が開削されたことを物語る。
 6. 本堂・塔・堂は規模で20:5:1の比率で、本堂南西端からの距離は、塔・堂の北東端までの約19.4mで等間隔となる。又本堂周辺の平坦地もほぼ同一の規格で造成されたようで、山地の中とは言ひながら計画的な配置を意図したことがうかがわれる。
 7. 出上した遺物は、土師器・須恵器、珠洲焼、越中瀬戸、唐津、鉄製品、砥石、五輪塔などで、9世紀から18世紀までの遺物が出土している。
 8. 遺物は、9・15・16・18世紀代の遺物が目立ち、10・11・12・13は量がやや少なくなるものの、底部や口縁を残す良品が目立つ。しかしながら14・17世紀代の遺物はほとんど出上せず、18世紀の陶磁器などが一気にその量を増加させる。
 9. 調査が、遺構検出に終始し、ほとんど発掘していないこともあろうが、寺院の移転が16世紀末頃と寺伝から推察されることから、17世紀代の遺物が少ないものと考えられる。18世紀に増加するのは、炭焼きなど跡地利用が盛んになったためと考えられる。
 10. しかしながら、14世紀代の遺物がほとんど見られないのが気にかかる。本遺跡の南東約500mにある上山古墓群でも14世紀代に造墓活動がとぎれ15世紀代に入り五輪塔をもつ墓が成立し終焉を迎える。この現象が、14世紀の遺物が少ない本遺跡でも発生しており2遺跡が不可分の関係にあったことがうかがえる。
 11. 本遺跡の麓の本覚院裏手に越中瀬戸の黒川窯がある。16世紀代の成立と考えられ、16世紀代の本遺跡の遺物の越中瀬戸は窯道具の転用品も含め黒川窯のものと考える。
- 以上であるが、本遺跡が古代から中世全般にわたり何らかの土地利用がなされていたことが今回の調査で明らかとなった。しかしながら多くの遺構を検出した真興寺跡の成立年代が今ひとつ明らかではない。今後さらに調査を加えその点を明らかにしていきたい。これまで上山古墓群の発見以来、年次的に調査を実施してきたが、今年度の調査で寺院の存在も明らかとなった。この2遺跡が同時代に存立し不可分の関係にあったことが次第に明らかとなった。また周辺地域にも関連すると見られる遺跡が数多く発見された。次年度以降、谷全体の調査を実施し中世全般にわたる宗教空間としての本地域のあり方を明らかにしていきたい。

引用・参考文献

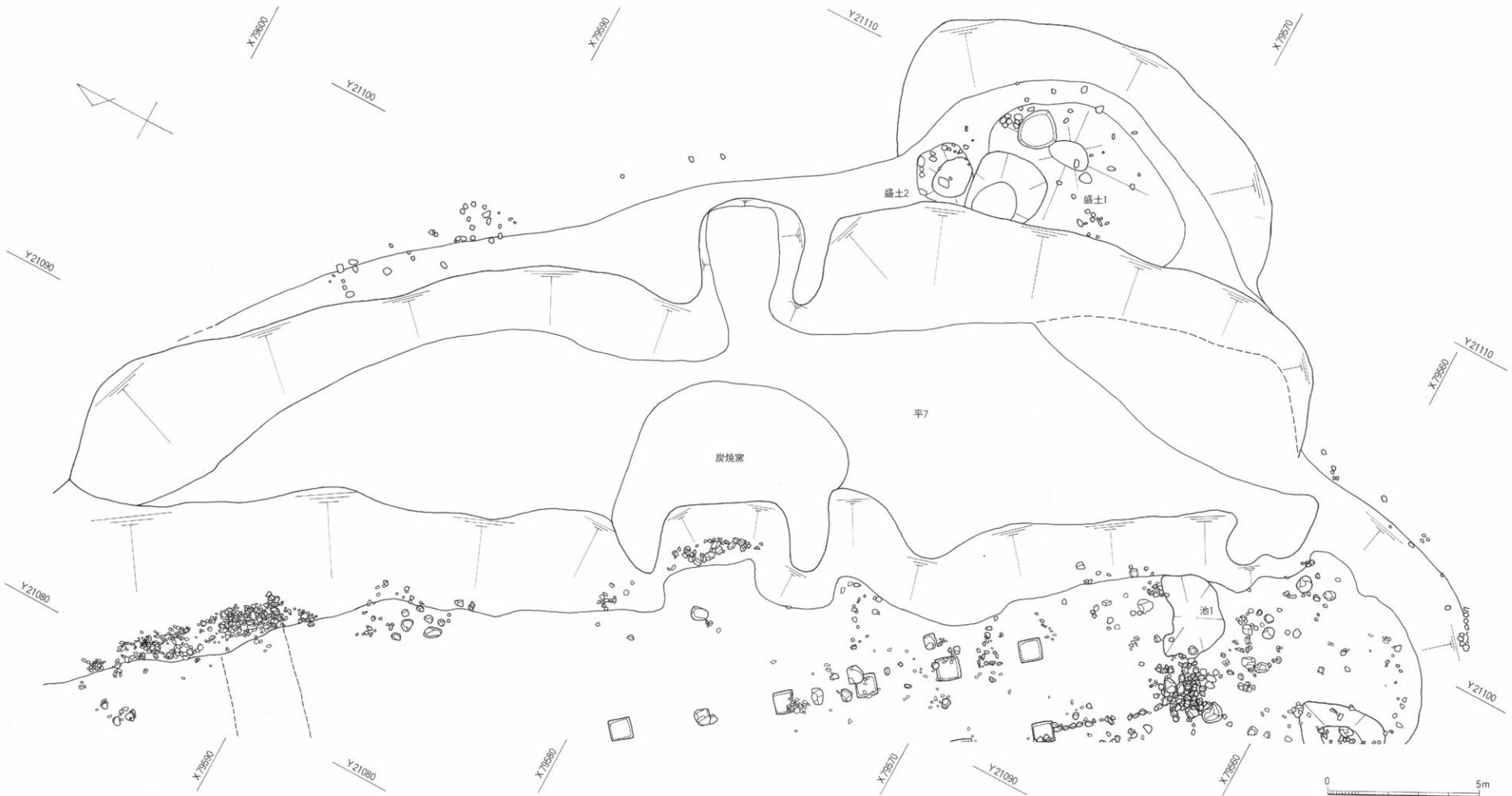
- イ 石田茂作 1984 「伽藍配図の研究」『新版仏教考古学講座 第2巻寺院』
- 伊藤延男 1978 「密教建築」『日本の美術143』 至文堂
- ウ 上田鷹 1996 「五重塔はなぜ倒れないか」 新潮選書
- 魚津市教育委員会 1997 「富山県魚津市出遺跡発掘調査報告書」
- 内田並紀子 1997 「越中における古代土師器の編年予察」『埋蔵文化財調査概要－平成8年度－』(助)富山県文化振興財團 埋蔵文化財調査事務所
- 宇野隆夫・西井龍儀他 1993 「第二章 医王の山と里の遺跡を探る」『医王山文化調査報告書 医王は語る』福光町・医王山文化調査委員会
- オ 大橋康二 1989 「肥前陶磁」 ニュー・サイエンス社
- 奥田直栄 1972 「古瀬戸の階級制」『陶磁大系 第六巻 古瀬戸』 平凡社
- カ 上市町 1970 「上市町誌」
- 上市町教育委員会 1995 「富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査概報」
- 上市町教育委員会 1997 「富山県上市町黒川上山古墓群第2次発掘調査概報」
- 上市町教育委員会 1998 「富山県上市町黒川上山古墓群第3次発掘調査概報」
- 元興寺文化財研究所 1982 「高野山発掘調査報告書」 考古学研究室調査報告書 第3冊
- キ 「紀伊続風土記」 1975 藏南堂復刻
- ク 倉田文作 1967 「密教寺院と貞觀彫刻」『原色日本の美術5』 小学館
- サ 助富山県文化振興財團 埋蔵文化財調査事務所 1996
『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ－』
(助)富山県文化振興財團 埋蔵文化財調査事務所 1998
『五社遺跡発掘調査報告－能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ－』
- 財和歌山県文化財センター 1990 「金剛峯寺遺跡」
- タ 田辺征大・森都夫 1986 「2 仏教 A寺院の造営」『日本歴史考古学を学ぶ(中)』有斐閣
- ト 富山大学人文学部考古学研究室 1989 「越中上宋窯」
- 富山県 1984 「富山県史 通史編II 中世」
- ヒ 日野西真定 1983 「高野山古絵図集成」
- ミ 宮田進一 1988 「越中瀬戸の窯資料(1)」「大境」第12号
『密教大辞典』 1931 法藏館
- ヨ 吉岡康暢 1991 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館
- ワ 和歌山県 1994 「和歌山県史 原始・古代」
和歌山県 1994 「和歌山県史 中世」



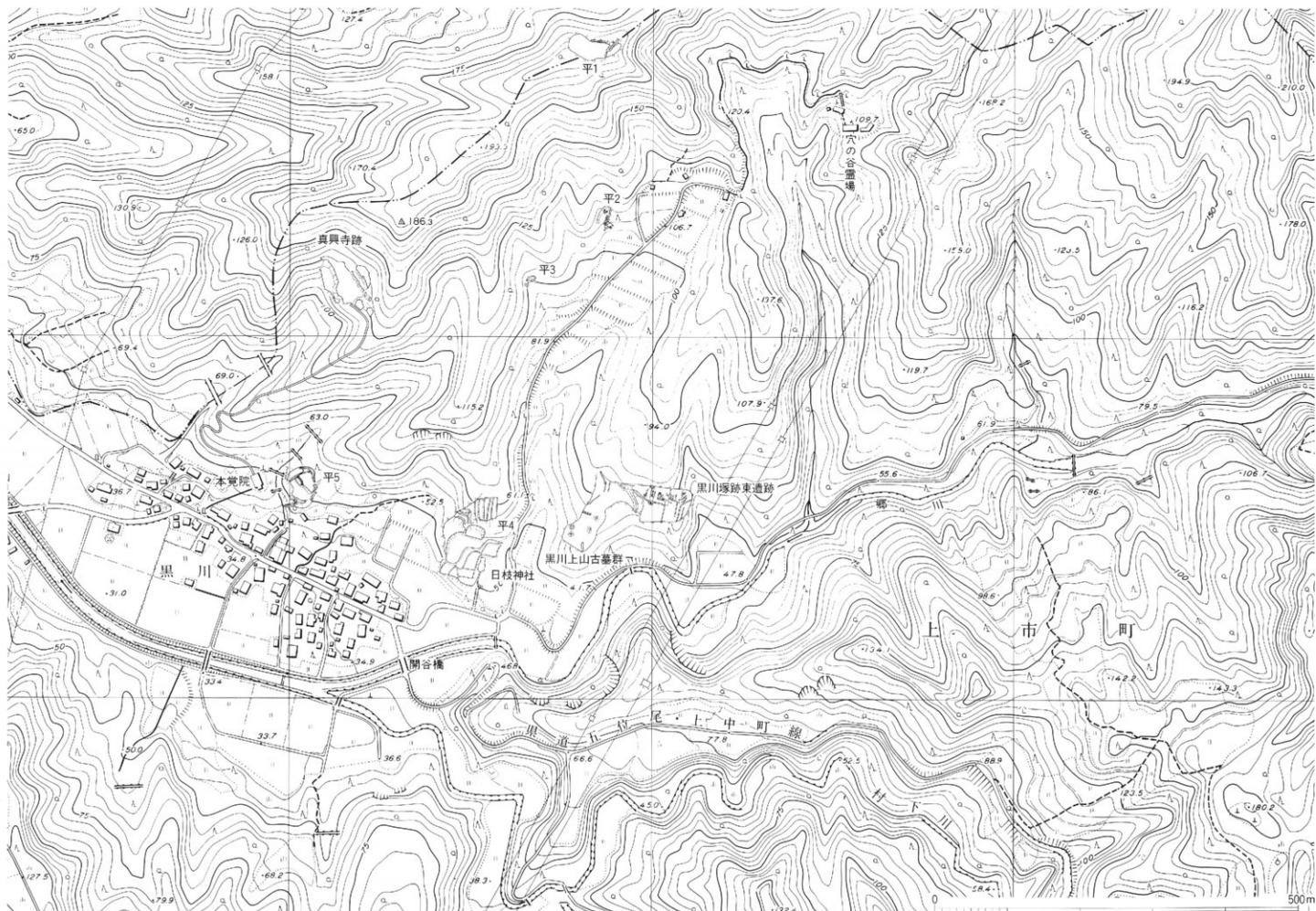
第3図 遺構全図(縮尺1/300) (遺構キャプションは想定)



第4図 遺構実測図 (縮尺1/100) 平坦面1-VI・平坦面1-V・平坦面1-VI



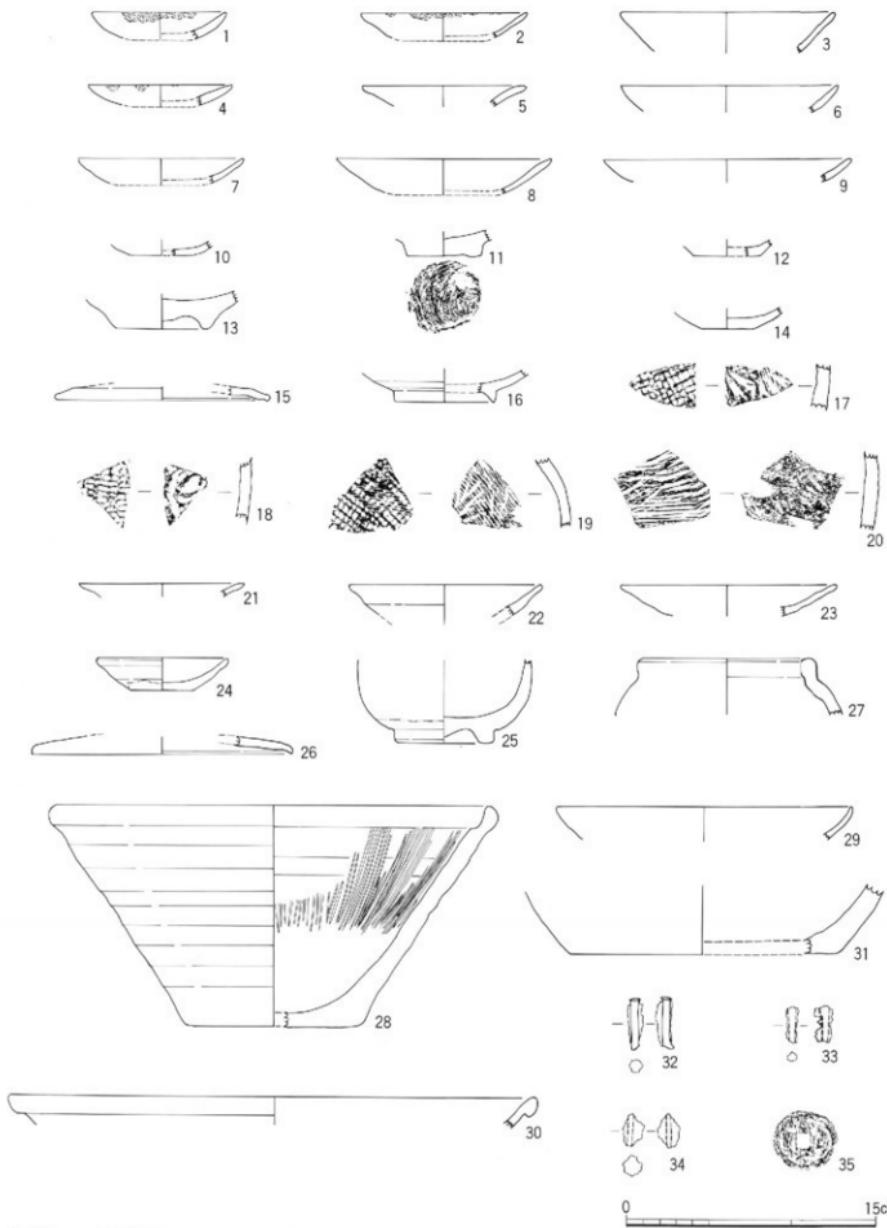
第5図 遺構実測図 (縮尺1/100) 平坦面7・盛土1・盛土2



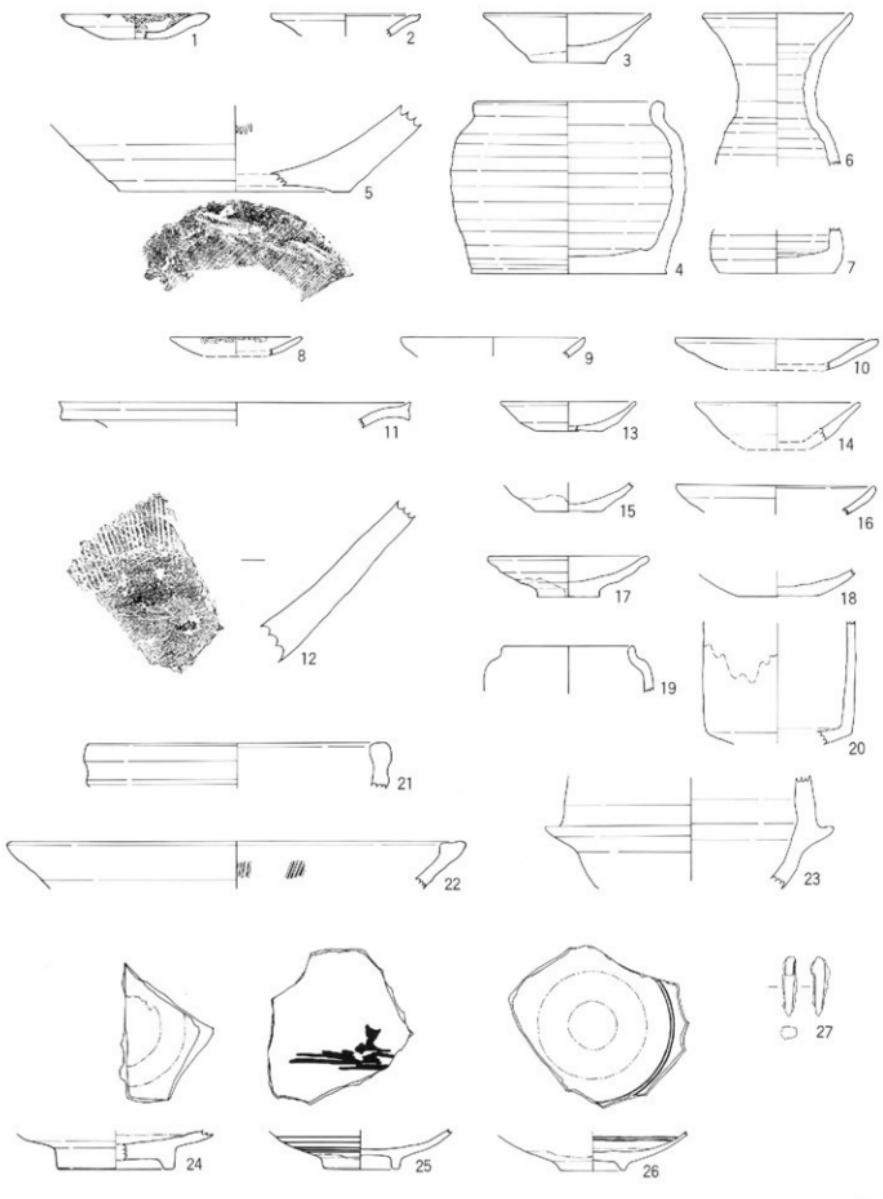
第6図 黒川地区周辺遺跡（螢場関係）分布図（縮尺1/5,000）



図版1 伝承真興寺跡周辺航空写真 (約1/6,000)

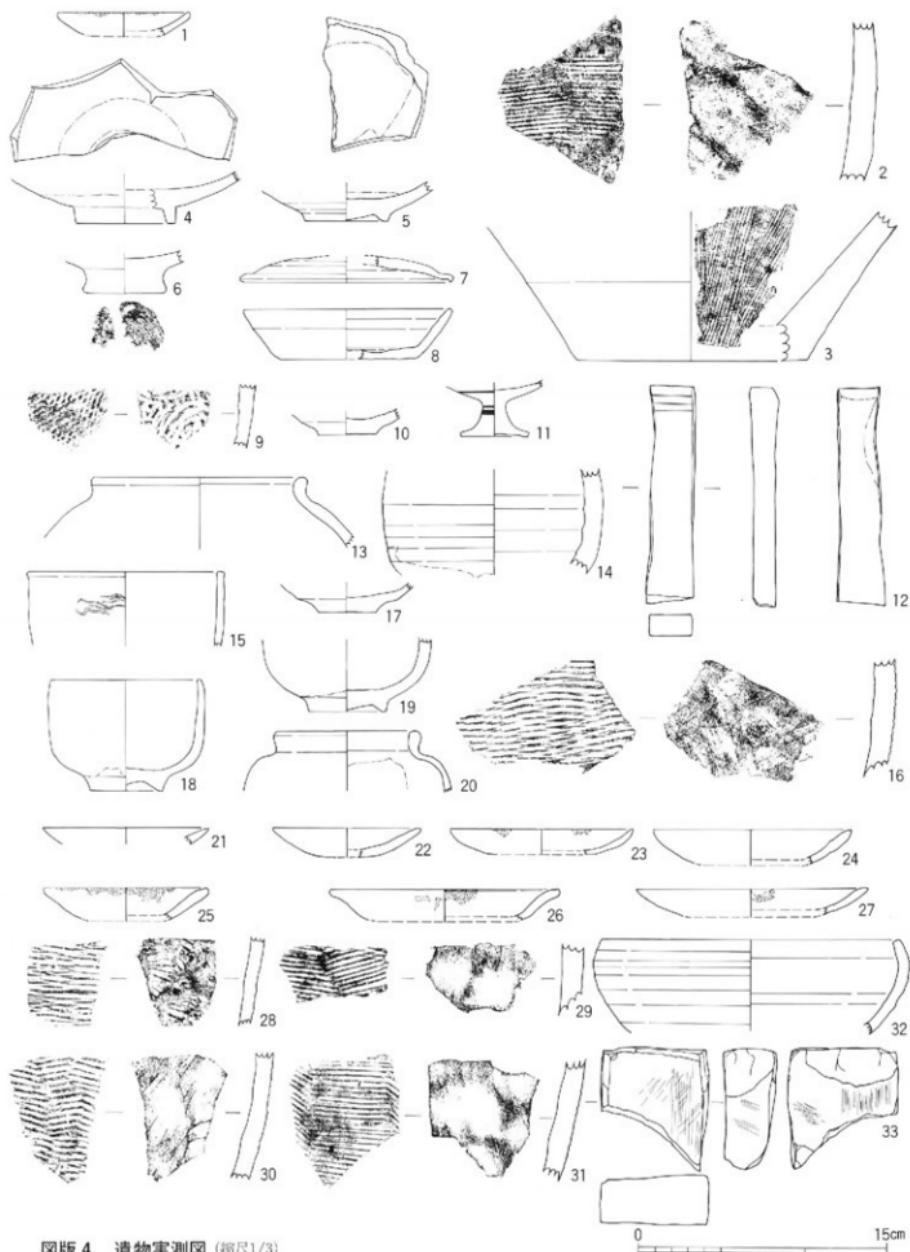


図版2 遺物実測図 (縮尺1/3, 35のみ1/2)
平坦面1-1・本堂跡(1~35)



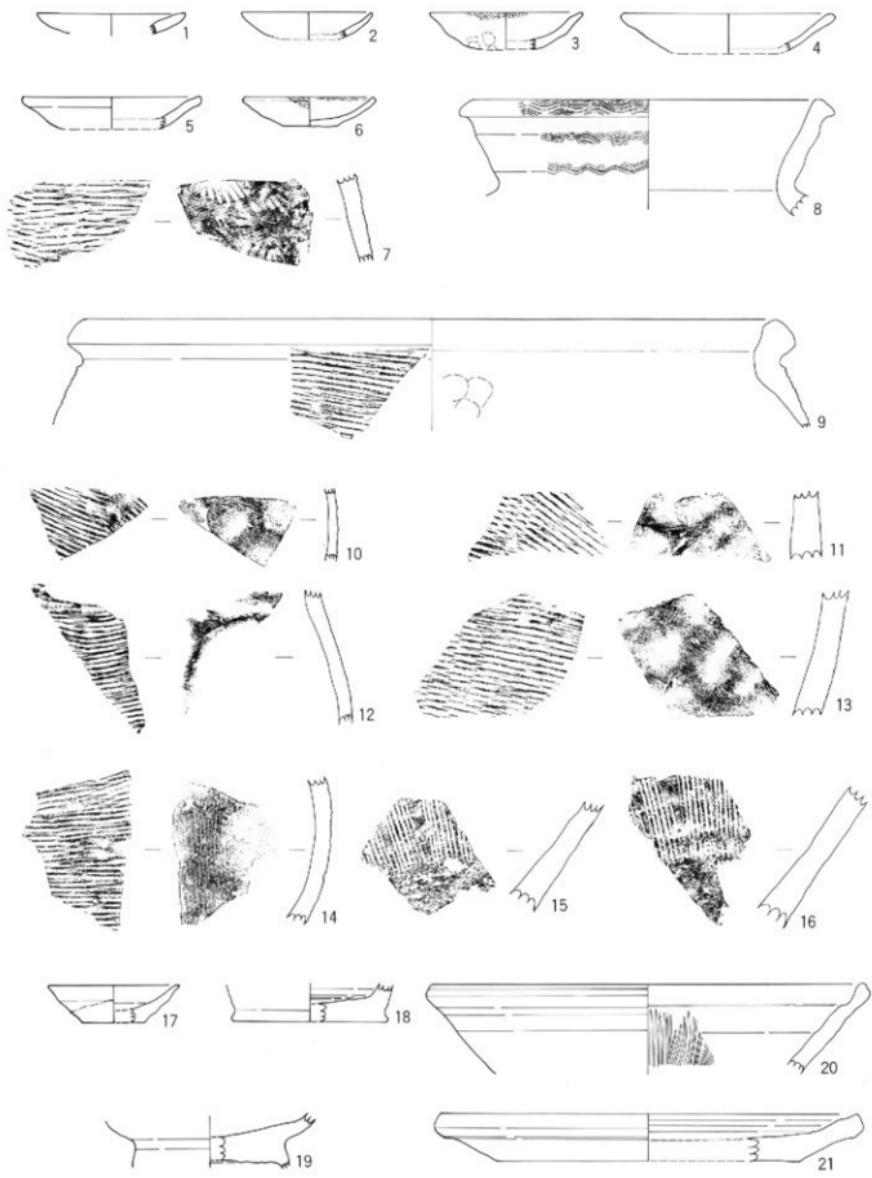
図版3 遺物実測図 (縮尺1/3)

石器(1), 池(2・2), 池1周辺(3・4), 石列1周辺(5~7), 平坦面1~Ⅲ(8~27)



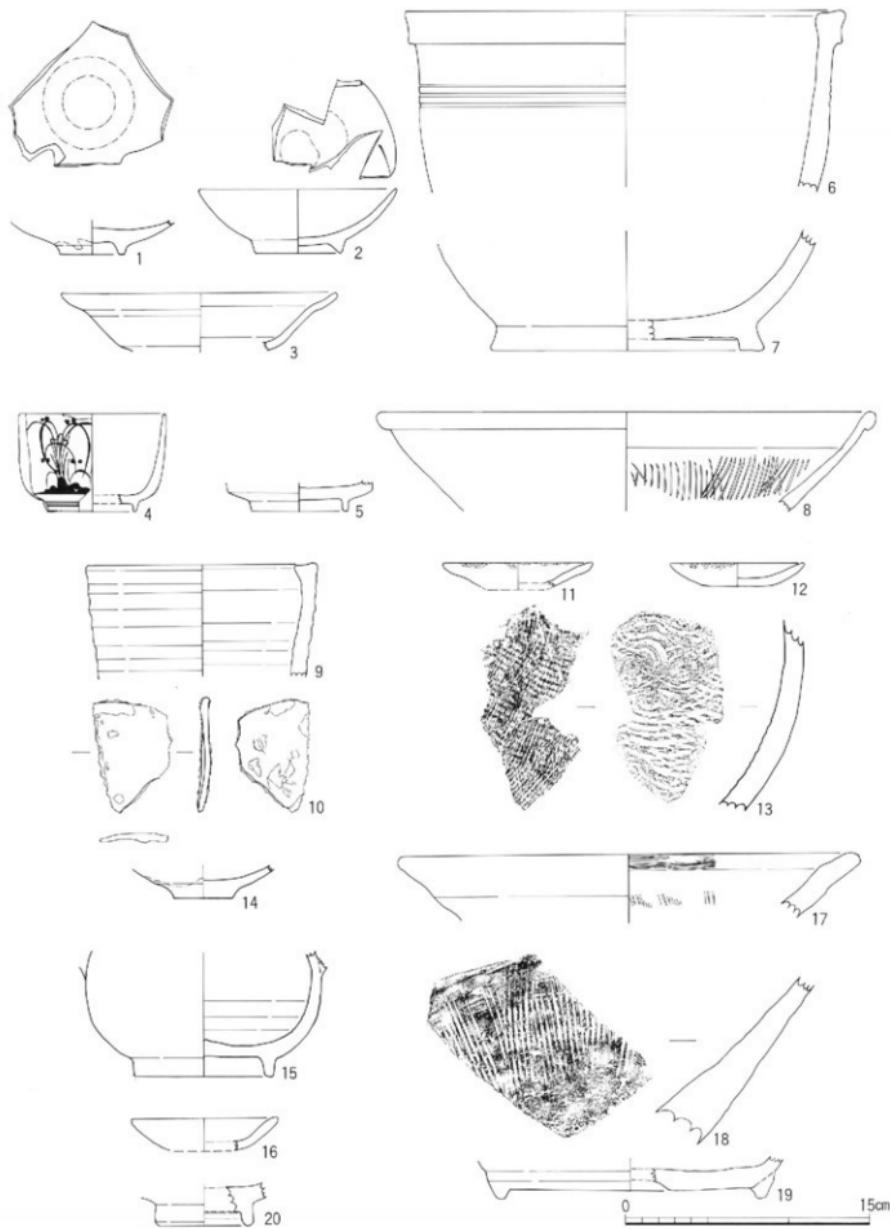
図版4 遺物実測図 (縮尺1/3)

集石1(1～5), 平坦面1～IV(6～12), 山門石列(13～15), 山門石垣(16), 平坦面2(17～20)
平坦面1～II(21～23), 平坦面1～V(24～33)



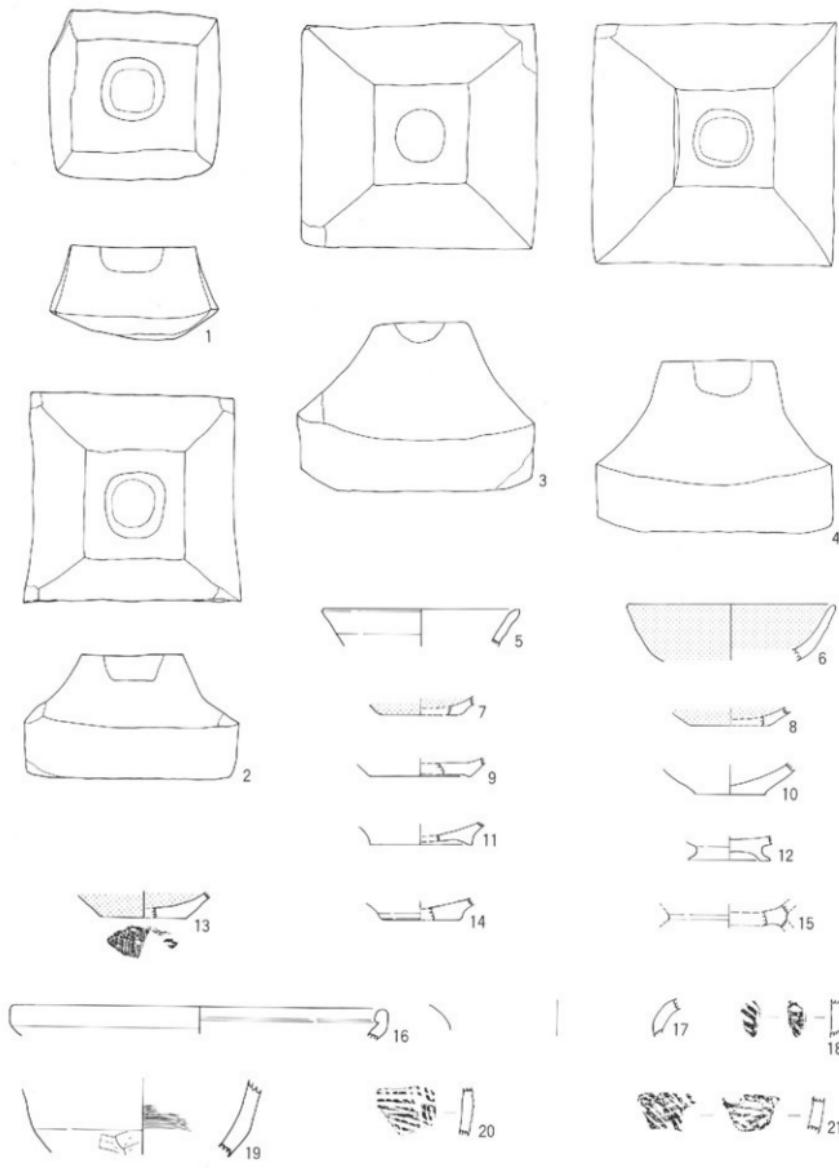
図版 5 遺物実測図 (縮尺1/3, 9のみ1/4)
平坦面 I-II・V周辺(1~21)

0 15cm



图版 6 遗物实测图 (缩尺1/3)

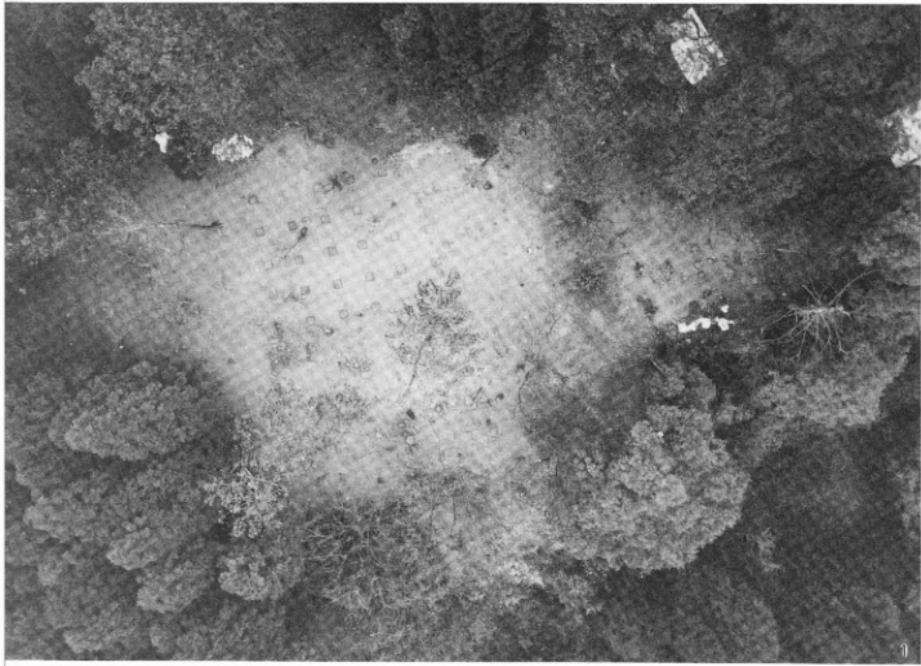
平坦面1·II·V周邊(1~8), 平坦面3·塔跡(9·10), 平坦面5·堂跡(11)
平坦面6(12), 平坦面8(13~15), 平坦面9(16~19), 滲土(20)



図版7 遺物実測図 (縮尺1/3)
平組面8(1), 山門石垣(2~4), 分布調査採集遺物(5~21)



図版 8 1.遺跡遠景（南西より・空中写真）, 2.遺跡全景（南西より・空中写真）



図版9 1.遺跡上空より、2.遺跡東側（塔・堂跡）



図版10 1. 遺跡全景（南東・堂跡より）, 2. 本堂跡（北東より）



2

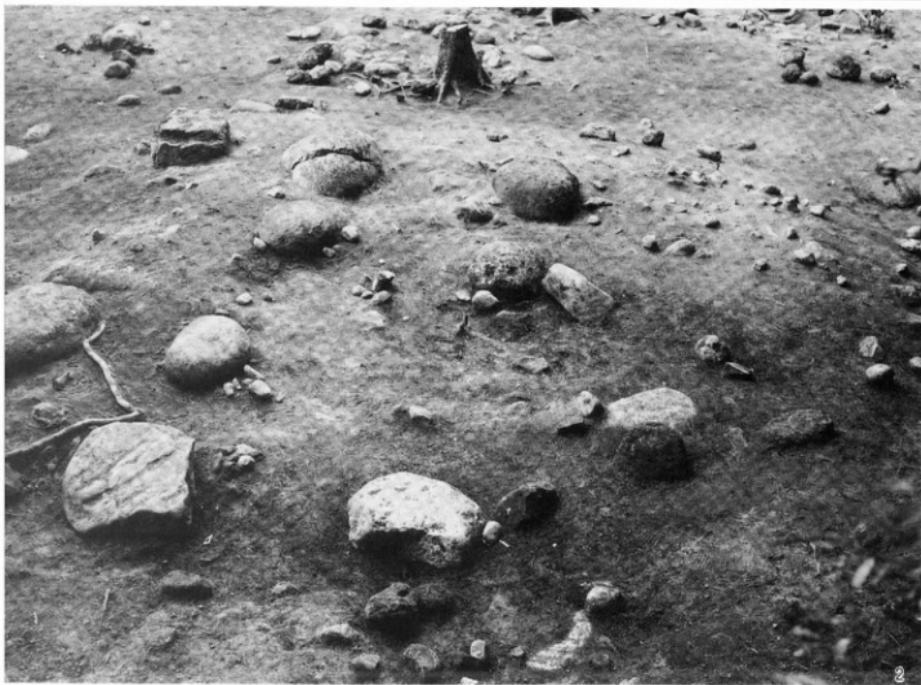
図版11 1. 本堂（東・池跡より）, 2. 池跡・石敷（西より）



図版12 1.山門跡より本堂, 2.山門跡 (石段・石垣)



1

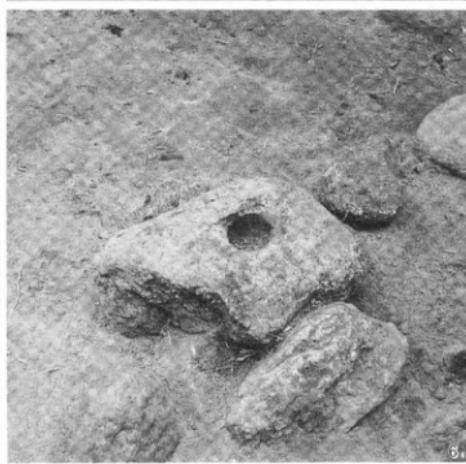
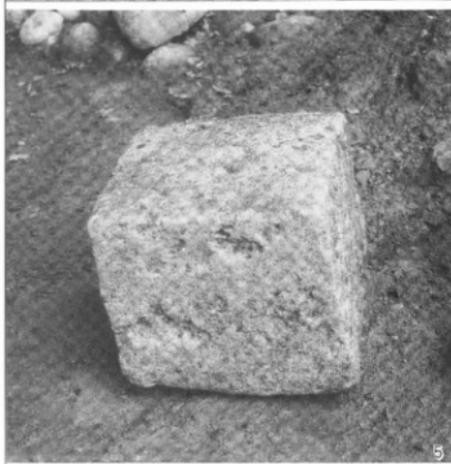
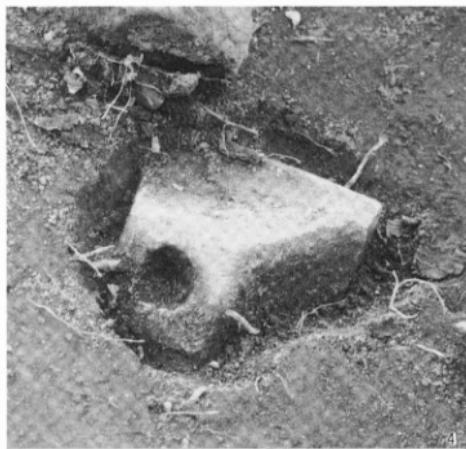
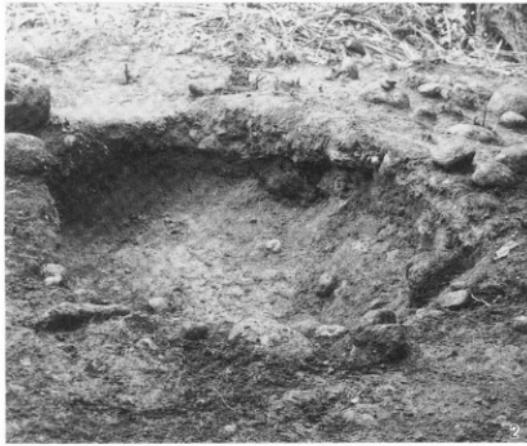


2

図版13 1.塔跡（北西より）、2.塔跡（南東より）



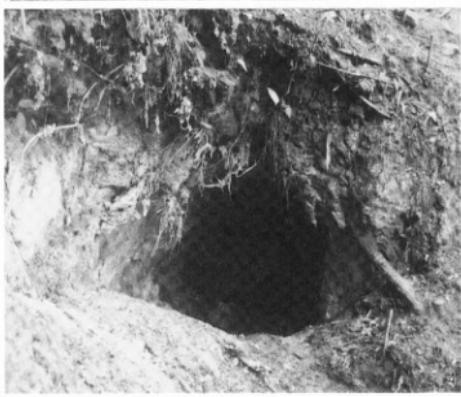
図版14 1.平坦面5・堂跡（北西より）、2.堂礎石（南東より）



圖版15 1.山門東側溝跡, 2.山門直下土壤 (墓跡?), 3.山門石垣內火輪
4.山門西側火輪, 5.山門石垣內地輪, 6.塔跡集石付近加工石



図版16 1.盛土1・盛土2（西より）, 2.平坦面1-VI（南より）, 3.平坦面1-VII（南より）



図版17 1.平坦面9（北西より）、2.平坦面4（北より）、3.湧水地（南より）、
4.横穴（西より）